

機関番号：13901

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2008～2010

課題番号：20520381

研究課題名(和文)

ソシュール『一般言語学草稿』の校訂と注釈

研究課題名(英文) Edition and commentary on "Writings in General Linguistics" by Saussure

研究代表者：

松澤 和宏 (MATSUZAWA KAZUHIRO)

名古屋大学・文学研究科・教授

研究者番号：30219422

研究成果の概要(和文)：1996年にソシュール自身の手による草稿が発見され、それ以前に発見されていた草稿と共に『一般言語学草稿』(ガリマール、2002年)が刊行された。しかしながらこの版は数多くの判読上の誤りを含み、50頁にのぼる草稿を無視している。本研究の目的は注釈を付した文献学的な校訂版を作成し、ソシュールの沈黙に関わる問題を検討することであった。すなわち、なぜソシュールは理論的体系の試みを放棄したのか、という問題である。本計画は、草稿の解読に伴う困難のために完全には実現できなかったが、草稿が我々に示すのは一般理論の構築の不可能性を表現しているもう一人のソシュールであることが明らかになった。

研究成果の概要(英文)：In 1996 a manuscript in Saussure's hand was discovered. It is published in *Ecrits de linguistique générale* (Gallimard, 2002) qui included an earlier discovered manuscript on general linguistics. But this edition, have many errors and don't notice 50 pages of nmanuscripts. The aime of present study was to make a philological edition avec commentry and examine question motivated by Saussure's silent : why Saussure has abandoned work of theoretical systeme ? This plan of edition is not achieved completely for difficulties of decipherment of manuscript, but it becomes clear that manuscripts show us a different Saussure who is exprssing impossibility of construction of general thorie.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	800,000	240,000	1,040,000
2009年度	600,000	180,000	780,000
2010年度	600,000	180,000	780,000
総計	2,000,000	600,000	2,600,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・言語学

キーワード：一般言語学・歴史言語学・意味論

## 1. 研究開始当初の背景

フェルディナン・ド・ソシュールの名が冠せられている『一般言語学講義』は、弟子に

あたるシャルル・バイイとアルベール・セシュエの手によって編纂・執筆されて、ソシュールの死後三年目にあたる一九一六年に刊

行された。現代言語学の公認聖書のごとき権威を賦与され、現代思想の原点などと評されるこの編著書は、学生の聴講ノートをを参照しつつも、三回の異なる講義を「有機的全体」に仕立て上げたもので、その成立そのものにおいて深刻な問題を孕んでいた。

そもそもソシュールは一般言語学講義において一度も「一般言語学」という名称を用いていないのである。それはあくまでも前任者の病氣退職を受けて大学当局が用意した名称であり、ソシュールは気乗りしないまま大学側の指示に従ったにすぎない。一九〇九年一月に学生の一人リードランジェは、ソシュールの言葉として「(一般言語学というような) 主題についての著作を著すことは考えられない。というのは著者の決定的な思想を表明しなければならなくなるのだから」と記録に書き留めている。事実、管見の限りでは、自筆草稿においても、ソシュールがみずからの「決定的な思想」を「一般言語学」として積極的に規定している箇所は一つも見あたらない。ソシュールが「一般言語学」の樹立を目指していたという通説は、少なくとも現時点では文献学的な裏付けをまったく欠いているのである。

ソシュール自身は、1880年代に言語や記号に関する一般理論の「書物」を構想していたことがあるが、その後この構想を断念・放棄したのであり、生前一般言語学や記号論に関する論考を刊行しようとする意図すらもってはいなかったという謎めいた事実が、すでに R.Godel *Les sources manuscrites du «Cours de linguistique générale» de F.de Saussure, Droz, 1857* によって明らかにされている。

ところが、この指摘はその後必ずしも十分に究められることはなく、ソシュールの完璧癖や逆説好きなどといった個人的な性格の問題に矮小化されてしまった観がある。エングラール版もまたあくまでも『一般言語学講義』に即した原資料の断片的提示に留まっております、原資料それ自体の提示にはほど遠いものである。なぜならそこでは原資料は『一般言語学講義』の本文に対応した箇所のみが引用されているに過ぎず、読者は原資料の前後の文脈を直接把握することが出来ない仕組みになっているからである。しかし見方を少し変えれば、『一般言語学講義』をあくまでも中心に据えた校訂版や解釈が批判的検討の対象とされることもなく自明のこのように流布し、今日のソシュール研究の方向をも規定しているということ自体、弟子たちの手による『一般言語学講義』の影響を払拭することがいかに困難であるかということを実に物語っているのである。

筆者はすでに『第三回一般言語学講義』などについて聴講ノートのぶんせきにに基づい

て論文を発表してきたが、近年この自筆草稿に全面的に取り組む必要を痛感するようになった。とりわけ 1996年にジュネーヴのソシュール邸で発見されたソシュールの新たな自筆草稿の一部は、ガリマールから「一般言語学草稿」なる書名で 2002年に刊行され、にわかにソシュールの自筆草稿への関心が高まりつつある。

## 2. 研究の目的

以上述べた背景を踏まえて、本研究の目的は、一般理論をめぐるソシュールの謎めいた沈黙のなかに潜んでいる〈思想の劇〉(E.Benveniste)を厳密に復元することにある。そのための最良の方法は、近年ようやく刊行され始めたソシュールの夥しい自筆草稿群の徹底した解説・分析・解釈においてほかにないと考え、ソシュールの理論的考察に関する草稿の厳密な校訂版を作成し、クロノロジーに即して提示することである。本研究は、ソシュールの言語学的探究を、そのもっとも生々しい痕跡である自筆草稿に遡って検討し、ソシュールが直面していた問題の一端を明らかにしようとするものである。これまでにエングラール版(1968-1974)に収録されていた自筆草稿に、1996年に発見されたソシュールの一般言語学に関する草稿を加えた一般言語学に関する草稿をオリジナルに基づいて、加筆や削除を復元した校訂版の作成が第一の目的である。すでにエングラールとブーケによって刊行された *Ecrits de linguistique générale* (2002, Gallimard)は、いくつかの看過しがたい問題を孕んでいる。

第一の問題点は、この校訂版が 1996年に発見された草稿の編纂にあたって何の断りもなく草稿の一部を勝手に省いていることであり、その箇所は無視しがたい量(50頁以上)にのぼることである。

二番目の問題は、草稿の加筆や削除に関してまったくの言及がないということである。エングラール版では加筆箇所とわずかながらではあるが、興味深い削除箇所が略号を用いて復元されて提示されていたことを思えば、ガリマール版はエングラール版よりもむしろ後退したと言わざるを得ない。

三番目としては、エングラール版をも含めた一般言語学に関わる草稿全体の提示が、なんらの厳密なクロノロジーに依拠していないという点である。この点でもエングラール版よりも後退しており、研究者の間に混乱を生む要因ともなっている。

第四に、校訂版でありながら、テキスト校訂やクロノロジーに関する必要な最小限の注記すら、簡略な序文を除くと、まったくないという点に端的に示されている。ソ

シュールの遅疑逡巡や思考の劇が見えなくなっている。また19世紀の言語学の動向やインド・ヨーロッパ語の知識を参照せずには、ソシュールの考察を十全に理解することはできないであろう。したがって注釈が極めて重要な役割を果たすと考えられる。

こうした問題点に留意しながら、自筆草稿を正面から取り上げ、新たな校訂と注釈を付した版を作成することで、専門的知識を持たない学生相手の晩年のソシュールによる「一般言語学講義」には見られないソシュール自身の探究の暗中模索に光をあてることが可能となるであろう。

### 3. 研究の方法

ガリマール版の元になったソシュールの自筆草稿のマイクロフィルムを使って、ガリマール版と比べながら一字一句検討しながら校訂の作業を進めてきた。ガリマール版と草稿との重要な異同を註で示した。ガリマール版の誤った判読転写をなるべく註で指摘し訂正した。

また草稿で空所として略されている箇所なども註などで、前後の文脈との関連で予想される語句を提示した。

またこれまでのフランス語のみならず、イタリア語版、英語版、ドイツ語版をも参照することで、有益な示唆を得ることができた。

また校訂上の註ばかりではなく、内容的に重要と思われた点、とりわけ同時代の言語学との関連に関しては、有益な情報を註として提示した。とりわけ当時の歴史言語学の中心的存在であるブルクマンやフィックなどとの関連に言及している。

### 4. 研究成果

当初の研究計画に沿って、『一般言語学草稿』の対象であるソシュールの自筆草稿の判読・転写・邦訳・注釈の作業を進め、その成果の一端は、論文として発表してきた。

まず第一に、ソシュールの独創と思われているものが、当時既にソシュール意外の言語学者によって提唱されていることが判明したことである。共時言語学と通時言語学の識別、あるいはランガー・ジュ・ラング・パロルの三分法はすでに同時代に提唱されて始めていたのであり、ソシュールもそのことを知悉していたことである。

第二に、ソシュールが、音と意味の二重性を刻印された言葉が、言葉を使う主体の意識と離れては存在しないことを常に出発点に据えていることが確認された。このために言語を対象とすることに伴う困難にソシュールが直面していることが、草稿を通して明らかに

なった。草稿が「言語の二重の本質」と題されていた所以である。これは言語を実体化していた同時代の歴史言語学者の科学主義的実証主義への批判に繋がるものであったと同時に、話者の意識に関わるものとして言語を捉える観点とは、以下の第三の重大な方法論的問題を提出してくる。

第三に、歴史言語学が主流である当時において、音声学もまた基本的に史的音声学であり、言語音の史の変遷をもっぱら追究していた。ソシュールは、話者の意識に関わる言語は、数世紀を超えた変化などを体験できないが故に、歴史言語学の観点は実際に言語を使用する主体の観点とは異質であることに気づいたのである。この観点から、歴史音声学と形態論とが性質の異なる研究であることを指摘し、前者が歴史的観点に立つのに対して、後者は「瞬時的な展望」 *perspective instantanée* に立っていることを、史的音変化と交替などの形態論的現象との相違を通して執拗に明らかにして この批判は、歴史言語学者が音変化と形態論を混同していた点に向けられている。ソシュールはこの時期には、まだ「共時態」 *synchronie* という用語を使用していない。

第四に、ソシュールは歴史のある時点での言語状態(共時態)における音声現象と見なされているものもまた、形態論的現象ではないのか、という観点からサンスクリット語の内連声などの分析を進め、音声的規則をむしろ交替と同様な形態論に読み替えていく。話し手に意識されている規則的音声現象は、形態論に属する。この形態論は語形や音声だけではなく、それらと意味との結びつきを注視している。ここで興味深い点は、ソシュールが形態論の同義語として記号論 *sémiologie* という用語を採用していることである。記号論という用語の使用において、言語 / 非言語の区別は問題とはされていない。重要な点は、記号論が音声学のように音声だけでなく、また意味論のように意味だけでもなく、音声と意味との分かちがたい結びつきにおいてはじめて成立する「記号」を扱うという点にある。話し手の意識にとって真に実在するものは、時代をはるかに超えた史的な音変化でも意味変化でもなく、意味と音声とが不可分に結びついた記号と別の記号との差異的な関係である。ここに歴史音声学が取り上げるもののなかったまったく新たな対象として「記号」が出現してくるのである。話者の意識に即している限り数世紀にもわたる音変化を通時的に

明らかにすることは不可能な話であるからである。したがって、ソシュールは音変化＝通時態と交替＝形態論＝共時態という識別に到達したことが判明した。言い換えれば、音を扱うのが音声学、形態を扱うのが形態論という当時の通念を、共時と通時という新たな観点から批判して、新たな再編成を試みたわけである。こうして音の問題と見なされてきた現象をも形態論的交替の現象として共時言語学の枠組みのなかで捉え直すことになった。

第五に、しかしそれであれば、なぜソシュールは共時言語学の論文なり書物を執筆しなかったのか、という問いが以前として残るであろう。おそらくソシュールが敢えて沈黙した理由は、共時言語学と通時言語学の区別という方法的整理の域内には納まらない問題に直面したことにあると思われる。その問題とは、ソシュールが執拗に繰り返し問い直している記号や言語の同一性の問題であると思われる。いかにして単位や記号、言語の同一性を確認できるのであろうか。ソシュールはそれを話者の意識に求めたのであるが、果たして話者によってその意識が異なるとき、それらの同一性を確認するものを「言語の科学」たる言語学は何処に求めるべきであろうか？おそらくソシュールは単位記号、言語の同一性の根拠をめぐって遂に明快な解答を得られなかったのである。ソシュールが直面した問題の所在はここにあると思われる。

第六に、以上述べた成果とは別に、本研究の過程で以下のような重大な困難に直面した。ジュネーヴ大学公立図書館に所蔵されているこの自筆草稿は Arch de saussure 372 なる分類番号の元に整理されているが、ガリマール版には収録されていない草稿が 50 頁を超えることが判明した。しかもその内容は、主にソシュール自身の若い日の業績である『インド・ヨーロッパ語における母音の原初体系に関する覚書』(1879年)に関する書評に対する批判的なメモであり、ギリシャ語やサンスクリットをはじめとするインド・ヨーロッパ語が頻出する。ガリマール版に収録されなかった理由として、判読に極めて手間がかかること、および内容の理解が容易ではないことなどが挙げられよう。こうした草稿は、学生相手の『一般言語学講義』の聴講ノートには読まれることのないソシュール自身の言語学的格闘の生々しい痕跡であり、同時代の言語学者からの「覚書」への批判への反論などが試みられており、ソシュール自身が『インド・ヨーロッパ語における母音の原初体系に

関する覚書』の限界や欠点について自覚的に反省しながら模索している様子がうかがわれて極めて刺激的である。比較言語学の最高峰とも言える『インド・ヨーロッパ語における母音の原初体系に関する覚書』から後年の共時言語学へ至る言語学的探究のプロセスを探るうえでも、一級の資料と言えよう。

最終年度の後半は、この手つかずの草稿の判読転写の作業に全面的に費やされた。まだこの部分の草稿は半分余り残っているが、ソシュールの『覚書』と後年の一般理論との内的連関を探る上で、決定的な重要性を有する貴重な考察が読まれるので、今後の最重要課題となった。この課題の発見も貴重な研究成果であったと言えよう。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 4 件)

- ①松澤和宏「草稿の解釈学」文学第 11 巻 5 号 pp50-62, 査読無, 2010
- ②松澤和宏「ソシュールの翻訳と解釈—時枝誠記による『一般言語学講義』批判をめぐる予備的考察」、高橋亨編『日本語テキストの歴史的軌跡』巻無, 2010, pp. 19-25 査読無.
- ③松澤和宏「1890 年代のソシュールにおける phonétique, morphologique, semiologie」日本フランス語フランス分学会 Cahier05. pp7-7, 2010、査読無
- ④松澤和宏「ソシュールにおける共時態と通時態の峻別について」, 月刊「言語」2009 年 38 巻 2 月号、査読無、26 頁～33 頁。

[学会発表] (計 1 件)

- ①阿部宏、松澤和宏「ソシュールと 19 世紀」日本フランス語フランス文学会秋季大会、熊本大学、2009 年 11 月 8 日。

[図書] (計 1 件)

- ①Kazuhiro MATSUZAWA Le « décousu » du troisième cours de linguistique générale et le cercle herméneutique in *Projet de Saussure*, Droz, Genève, 2010, pp. 61-78.

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

松澤和宏 (MATSUZAWA KAZUHIRO)  
名古屋大学・文学研究科・教授  
研究者番号：30219422

### (2) 研究分担者 なし

### (3) 連携研究者 なし